

6 書き手重視のアプローチ

書き言葉には、話し言葉にはない様々な特徴がある。その1つは、書き言葉が時空を超えてメッセージを伝えられるということである。つまり、書き言葉により表現されたメッセージは、遠く離れた読者にも、さらには未来の読者にも伝えることができる。一方、これは書かれたメッセージが長期間保存される上に、読み手が同じ空間に存在しない場合が多いことを意味する。したがって、メッセージを読み手に的確に伝えるために、書き手は様々な試行錯誤を繰り返しながら文章を作成しなければならない。しかし、テクスト重視のアプローチは書きあがつた文や文章に焦点が置かれているため、目的を達成するために書き手が辿る試行錯誤のプロセスについては考慮されない。また、適切な文章の型を重視するあまり、書き手の創造的思考を抑制しかねない。こうした問題点を受け、書き手に着目した新たなアプローチの必要性が唱えられるようになり、書き手重視のアプローチが誕生した。

従来、書き手が辿るプロセスは、着想の段階（pre-writing）から、実際に文章を作成する段階（writing）、そして書かれたものを推敲する段階（re-writing）へと直線的に進むと考えられていた。しかし、アメリカの認知心理学者のFlower and Hayes（1981）は、書き手がこれらの段階を行きつ戻りつしながら文章を書き進めていくということを明らかにし、認知プロセスモデルを提唱した。大井（2009）によれば、このモデルでは認知プロセスに影響を与える要因として、「課題環境」と「書き手の長期記憶」が設定されている。しかし、ここではこのモデルの中心である「ライティングの処理過程」に焦点を絞って見ていくこととする。「ライティングの処理過程」は「モニター」による管理の下、「構想」、「文章化」、「推敲」という段階に分かれて機能している。「構想」では、情報の整理や分類などを通して、生成されたアイデアの体系化が行われる。また、文章を書く上での目標も設定される。その後「文章化」されたアイデアに対する「推敲」の段階に移る。この段階では、書かれた文章に対する評価や書き直しが行われる。なお、これらのプロセスは直線的ではなく、螺旋を描くように繰り返しながら進められていく。

未熟な書き手と熟達した書き手のプロセスを比較すると、熟達した書き手がより「構想」と「推敲」を入念に行なうことが知られている。未熟な書き手が辿るプロセスは**知識伝達モデル（knowledge-telling）**と呼ばれており、構想を練ることなく、記憶にあることをそのまま文章にする上に、十分な推敲を行わない傾向がある。一

方、熟達した書き手が辿るプロセスは**知識変形モデル (knowledge-transforming)**と呼ばれ、文章を書く前に設定した目標に従い、内容と表現の双方について問題解決を行いながら文章が書き進められていく。また、繰り返し推敲が行われ、設定された目標に則した文章が作成されていく (Bereiter & Scardamalia, 1987)。さらに、L1とL2におけるライティングプロセスを比較した場合、相互に類似したプロセスを辿りながらも、L2による「構想」、「推敲」には様々な困難点が見られることが示された (Silva, 1993)。したがって、ライティング能力を向上させるためには、「構想」と「推敲」における重点的な指導を行うことが必要であると考えられる。

大井・上村・佐野 (2011) は、「構想」を「アイデアを生み出す」及び「アウトライナーを作る」という2つの段階に分類し、それにおける効果的な方法を提示している。それによると、「アイデアを生み出す」段階における指導法としては、**フリー・ライティング (free writing)** と **ブレーン・ストーミング (brainstorming)** が効果的である。フリー・ライティングとは、形式面には焦点を当てず、思いついたことをひたすら書かせる指導法である。この指導法は、外国語で文章を書く際の心理的な重圧を軽減できる上に、思いもよらないアイデアが発見されることが期待できる。一方ブレーン・ストーミングは、決められた内容に関してグループで意見を出し合うことで、多方面から新しいアイデアを見つけ出す方法である。それにより、一人では思い至らないようなアイデアを発見できる効果が期待される。また、これらの方法により得られたアイデアを、クラスタリングやピラミッドパターンを活用して整理することが有効である。これらは、個々のアイデア間の関連性や階層性を視覚化するために効果的な手法である。そして、ここまで段階で体系化されたアイデアに基づき「アウトライナーを作る」ことで、よりよい文章が作成できるようになる。一方「推敲」段階においては、複数回に渡って評価と書き直しを行うことが必要である。特に、内容面から文章構成、そして統語レベルのように、その都度対象を変更することが効果的であると考えられる (上村, 1993)。

以上のように、書き手重視のアプローチでは、主に書き手が辿るプロセスに基づいた指導が行われる。しかしながら、ライティングのプロセスは非常に複雑であることに加え、書き手の母語の影響などについても、いまだに明らかにされていない部分が多い。今後は、日本人英語学習者の辿るプロセスが解明され、より効果的な指導法の開発が行われていくことが期待される。

(上原 岳)